

開催趣意

人生の最終段階における歯科医療の実践

食べるを支える、食べないを支える、食べたいけど食べられないを支える

病院歯科介護研究会 第 27 回総会・学術講演会

大会企画委員長

まんのう町国民健康保険造田歯科診療所 木村年秀

2040 年には年間約 170 万人が死亡すると推測されています。我が国は、多くの高齢者が多くの歯を残して最期を迎える「多歯多死社会」を迎えています。人々が自分らしく生き、幸せな最期を迎えるために、私たち歯科専門職は国民の人生の最終段階にどのように関わったらよいのでしょうか？日々、病院や介護施設、在宅医療の現場で、目の前の患者様に向き合い、最善と思われる歯科医療やケアを提供している我々は、人生の最終段階で受けたいもしくは受けたくない歯科医療・ケアについて、ご家族等や他の医療・介護従事者と詳しく話し合っているといえるでしょうか？

2006 年に富山県射水市における「人工呼吸器取り外し事件」が報道されたことを契機として、翌年に策定された「終末期医療の決定プロセスに関するガイドライン」は、その後 10 年以上を経て、地域包括ケアシステムの構築に対応したものとする必要があること、ACP（アドバンス・ケア・プランニング）の概念を踏まえた取組みが普及してきていることを踏まえ、病院での延命治療への対応だけではなく、在宅医療・介護の現場で活用できるよう 2018 年に「人生の最終段階における医療・ケアの決定プロセスに関するガイドライン」への改訂が行われました。

一方、高齢者歯科医療の責任学会である日本老年歯科医学会は、昨年、関連学会との協調や他（多）職種との連携・協働の推進を目的とした会員の行動指針として、①高齢期における人生の最終段階における歯科医療の在り方、②人生の最終段階における医療・ケアの決定プロセスに関するガイドラインに沿った具体的な対応を「高齢期における人生の最終段階の歯科医療に関する行動指針」にまとめています。まさに人生の最終段階の歯科医療の実践議論は始まったばかりなのです。

そこで今回の学術講演会は、「人生の最終段階における歯科医療の実践」をテーマといたしました。そして、サブタイトルを「食べるを支える、食べないを支える、食べたいけど食べられないを支える」としました。最後まで美味しく口から食べることを希望される方はたくさんおられます。一方、誤嚥性肺炎になりたくないから口から食べなくてもいい、それよりも家族と少しでも長く一緒にいたいという方もいます。さらに、嚥下機能が低下しているため胃瘻造設し、病院では禁食と言われた。それでも少しでも口から食べたいという方も少なくありません。病院、施設、在宅医療の現場では、ご本人やご家族、医療・介護の担当者同士でとじっくり話し合う場面が必要です。お元気な時から、もし食べられなくなったらどうするのか、ご希望を確認しておく必要もあるでしょう。

プログラムでは、4名の講師の先生方にご講演いただきます。まず、地域におけるACP実践の第一人者である片山陽子先生（香川県立保健医療大学副学長）には、演題「生きがいある人生・希望を支える」のご講演をしていただきます。次に、在宅医療の現場で歯科医療・ケアの実践をされている下村隼人先生（医療法人社団駿陽花 しもむら歯科医院 院長・理事長）には「歯科が担う在宅医療での役割」、篠原弓月先生（口腔栄養サポートチーム レインボー代表）には、「最期まで口が口らしく ～最終段階で必要とされる口腔の緩和ケアのために～」のご講演をお願いしています。最後に、記者として様々な地域で在宅看取りの取材をされている佐藤 陽様（朝日新聞文化部be編集部）には「幸せな最期を迎えるために～『それぞれの最終楽章』取材で感じたこと」のご講演をしていただきます。

さらに、講演後には講師の先生方とともに意見交換を行う場、交流会も設定しております。参加者同士の意見交換やネットワーク構築の場として、より多くの知識を深めていただければ幸いです。皆様のご参加を心よりお待ちしております。